

日伯新聞附錄

伯國聖市マエストロ・
カルヂン街一二〇九
(ツエルゲイロ二五八)
發行所 日伯新聞社
【毎週一回發行】

君が代

千代に八千代に
さざれ石の
いはほとなりて
こけのむすまで



天皇陛下には御年三十九を迎へさせられ、天璽といふ御璽しく、玉體いやが上にも御健勝にわたらせられ一億蒼生のひとしく喜びにたへないところで瑞祥たちこめる大内山の緑深く、聖恩の安大を仰ぎ、皇威の四海に遠きを拜し奉つて、われ等在位二十万同胞こそぞつて、はるかに東天を拜し、わが皇室の御聖安を慶祝し、聖壽の萬歳を和唱し奉ると共に、興亜建設のために身命を吾國に捧げ第一線に活躍をつづけてゐる皇軍將士に對し感謝の意を表するものである

鄭州附近の殘敵

六千名の大撃滅戦

濃霧のうむの空そらからビラを撒まく



黄河の北岸、隴海線鄭州附近の、敗残兵を掃蕩してゐた上、杉本兩部隊は、約六千の敵を黄河の東西四十八キロ南北二十四キロの中に包圍し

天長節
の歌

今日のよき日は
大君の
生れ給ひしよき
日なり
今日のよき日は
み光りの
さし出給ひし
よき日なり
光りあまねき君が
代を
祝へもろ人もろ
共に
恵みあまねき
君が代を
祝へもろ人もろ
共に



顎あごが落おちた話はなし

花月亭九里丸

わらわし餘の北支班で山西省
遊樂へ行つた時に、野獸病院
で幽閉されたやつてゐますと
前で一生懸命に戦つてゐると
患者、その中の一人が顔中細
帯してゐました。擦げば下顎
の右から左への貫通創です。
この兵隊さんはどうして顎を
怪しめましたのでせうか。
折口鎮の遠戦に参加した木
田茂一さんは山陽健児で、上
以來今日までの、鐵の兜の
折口鎮で四日三晩は御敵も
食べず、水もなしに腹は減つ
てもくさは出来るゾと大威
張で戦つてはゐましたが、矢
つ張腹はだん／＼減つて来る
目ぼが／＼として來た。手足
の感覚が變になつて來た時に
友軍の輜重隊が飛んで來て一
つ二つの羊羹を手渡しとい
れた。木田君「あゝうまい、
こりやうや」と欣んだ途端
御敵が飛んで來て、顎が落ち
たんださうです。

海の荒鷲密雲ついて

[illegible]

知識の泉

陶磁器、つまりせともの、輸出では、今までドイツが世界第一でしたが、昭和八年ごろから、日本がドイツをしのいで、現在では断然日本が世界一です。



急ぐほ
母さんの急ぐほは
左のほゝ

電 田 和
子 教 田 和

わたしのゑくぼは
右のほゝ
なぜかどちらも
片ゑくぼ
母さんにそのわけ
聞いたなら
一はじめは二つ
あつたけど
一つはあなたに

あげたから
残り一つに
なつたの」と
ニツコリ笑つて
おつしやつた
左のほゝの
片あくば
ポコンと見せて
おつしやつた

てんちやうせつ
天長節
とくべつしやしん
特別寫眞ニユース



は、なん／＼しい遊戯にひきかへて、ゲリラ戦の得意な陸敵の征伐は、かくれず心です。勇ましい兵隊さんは、零下何度の北支に……
寒風荒ぶ中支の奥深くに……夏夏やうに暑く、南支に……この
目立ない苦心をくりかへしてゐます。(1)南支、江の敵を追つ
て、かくれる物もない廣野に散開した石本部隊、(2)星子
城、(3)馬場の十部隊です。古塔に夕陽あめく、枯れ風に鳴つて、
軍馬あひなく、(4)對岸に残敵あめく、凍る陽湖畔にそ
つて、偵察に行く騎馬の勇士、(5)道のまん中に、敵が掘つて挑
げられ戦場を掘つてシヤッ一枚で遠退を圖る、敵部隊の勇士、
南支に散開する。(6)……といふのにより、寒しい、腹中、胃を
暖める馬肉の勇士が、戦を終つて、汗をふき……一休み。



父は出征、母は病死、
悲しみの泰男君を救へ

同級光一君の銃後美談



八王子市第二小学校はお母さんを中心に、
三年の石井泰男君の銃後を守つてお父さん
お父さんは、五人の兄の斃旋する日を待
弟を残して去年出征つてゐましたが、頼り
しました。五人の兄弟にしてお母さんは、お
親戚の家に引きとら

さいとうたいし
齋藤大使の遺骨

アメリカ軍艦に護られて
横濱につきましました



先生の、去る二月二十日、日本と米國との交は

りて盡した齋藤大使 乗せられて日本に送
の靈にお禮するため られることになりま
お母は一萬トンの巡した。アストリア號はこぎり 去る十七日の
洋艦アストリア號に アナポリス軍港を去 朝、横濱に着きました
が、お嬢さんの祥子さ

の悲しみにすつかり沈んで、勉強も落付いて出来ないほどでした。が、この様子を見た同級の野口光一君は泰男君の傍に行つて、「何かわけがあるのだらう、僕が力になるよ」

先だ つてジヤンで太平洋を横断した。それからアメリカ北端のデユニスへて、ジラルタル海峽から大西洋（アトランティック）に乗り越してマゼラン海峡（マゼラン・ストライツ）のり出した。

ヨツトを操りたゞ一人
世界一周のイタリー

間もなくあこがれの日本に

僕の手でおへなかつてゐるんだらう。」と泰男君の無二の親友となつて慰めてゐましたので、僕のお父さんは眞人、石井少年は涙と共に、會の班長で、戦後の世、お家の事情を語りま話を見てゐるんだ。君！した、光一君はお父さ（眞眞は野口君（右）のお父さんは出征しにも告げて、今ではと石井君）

月 夜

子ナナ中²田

月夜に 月夜に
何處からか
さなな笛の音
聞えます
月の光のさえるよな
木の葉の夜露のすべるよな
靜かな笛の音
聞えます
月夜に 月夜に
何處からか
さなな笛が
聞えます
星の穂の歌のよな
花の夜露の光るよな
楽しい歌が
聞えます

数字の假名

数字の假名
漢の「一」書いてある文字名を「一」と書きます。例へば「一六五」は「アサガ五」といつたやうに。これをうまく當てはめて、一番下の数字を左から右へ讀んで下さい、何と書いてありますか。
 (答) ヘイタイサン アリガタウ。(木村正起)



5 12 10 9 6 7 1 2 15 10 13

甲板 船を閉てしまへば船は水に入らぬ事もなく約二米の船艀には、圖書室、寢室、台所、自動昇降機などもつてゐるすばらしいものです。ソレント、イノさんは東京ついたら、それから上海へゆき、マレー半島のシンガポール、ジャバタのパンジャヤ、インドのカルカッタからブリティッシュ・インドのケルプタワンをまはり、ジャバタから清國からリマへと、四ヶ年を費してつてつかうといふのです。



